西トップ遺跡の調査

－第18次－

1　はじめに

西トップ遺跡では、2011年以来、祠堂を中心に解体修復作業を実施してきた。2023年度には中央祠堂の再構築を完了し、南北両祠堂とあわせて祠堂全体が落成した。2023年度中に、解体・再構築による修復作業は祠堂正面（東面）の仏教テラス部分に移り[1)]、その東端部分を除いて、2024年５月にはひと通りの目途がついたところである[2)]。

これまでは寺院の境内とその建築遺構に焦点をあてて調査研究を継続してきたが、寺院の歴史的・社会的成り立ちを考える上で、また、将来的な史跡整備も視野に入れて、その周辺の状況も詳らかにする必要がでてきた。寺域の東側には南北通路が走り、南東には浅い窪地や小丘がみられる。これらは、かつての寺域周辺に展開した区画割や生活痕跡とも考えられる。こうした問題意識にもとづいて、第18次調査は、寺域東側の南北通路と南東に所在する窪地の性格をあきらかにすることを目的とした。

以下では、第18次調査成果の概要について報告する。調査期間は、2024年２月21日から３月２日である。調査参加者は、山藤正敏、庄田慎矢、笠原朋与、ラム・ソピアック、ロエン・ラヴァッタイ（以上、奈文研）、下田一太、田中美和（以上、筑波大学）であり、奈文研が雇用する現地作業員10名が調査の支援にあたった。

2　調査の方法

第18次調査では、寺域東側の南北通路と南東の窪地の間に位置する土手を中心として、両者にまたがる調査区（南調査区：東西34m、南北１m）を設定した（図７）。調査区中心から東西に５m単位で区切って小地区を設け、東側をＥ１～４区（東区、通路側）、西側をＷ１～４区（西区、窪地側）と呼称した。なお、調査区末端のＥ４・Ｗ４区はそれぞれ東西幅２mである。概ね、東区が南北通路とその両側、西区が窪地にあたる。最深部は東区で地表下約2.0m、西区で地表下約1.5mであった。なお、時間の制約から、東区下半では南半50cm幅のみを掘削した。

また、西トップ境内を取り囲む外周ラテライト列東南隅外側に取り付くかたちで北調査区（東西１m、南北1.5m）を設定し、南調査区における基本層序を検証した。

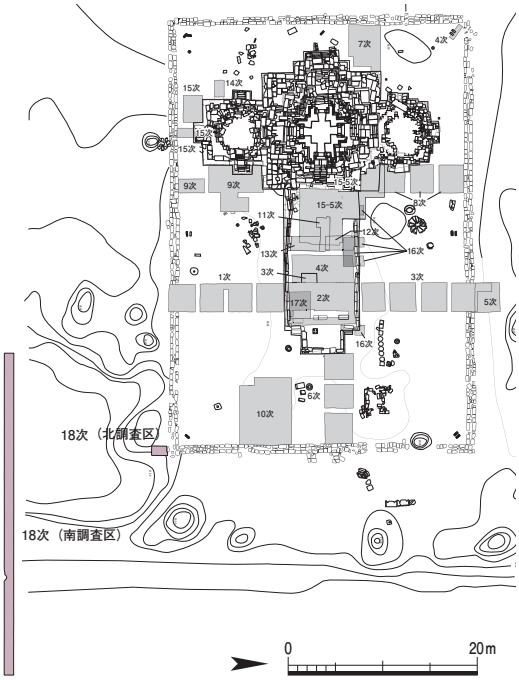


図７　調査区位置図

3　基本層序

南調査区　　東区と西区では基本層序が異なるため、別々に記述する。東区では東西で土層堆積状況が異なる。東区東半（Ｅ２～Ｅ４区）は南北通路部分にあたり、上層から、表土（20～40cm、図８土層図上Ｅ-Ⅰ）、白黄色砂（25～60cm、図８土層図上Ｅ-Ⅱ）、灰黄色土および緑灰色土（30～60cm、図８土層図上Ｅ-Ⅲ）、暗緑色土（20～40cm、図８土層図上Ｅ-Ⅵ）、暗緑灰色土（30～40cm、図８土層図上Ｅ-Ⅷ）、暗灰色土（20cm、図８土層図上Ｅ-Ⅸ・Ⅹ）が主に堆積し、これより下層には自然堆積とみられる明灰色土が堆積する。白黄色砂は調査区東方に隣接する小丘からの流土であり、これより下層が遺構堆積土とみられる。東区西半（Ｅ１～２区）は南北通路と窪地の間の土手にあたり、上層から、表土（30～50cm、図８土層図上Ｅ-Ⅰ）、橙灰色土（10～20cm、図８土層図上Ｅ-Ⅱ）、青橙色土（10～40cm、図８土層図上Ｅ-Ⅳ）、橙灰色シルト（20cm、図８土層図上Ｅ-Ⅴ）が堆積し、これより下層には自然堆積と考えられる橙灰色シルトおよび白橙色土がみられる。

西区では上層から、表土（25～40cm、図８土層図上W-Ⅰ）、灰褐色砂（15～20cm、図８土層図上W-Ⅱa）、上層橙灰色シルト（25～40cm、図８土層図上W-Ⅱb）、下層橙灰色シルト（15～85cm、図８土層図上W-Ⅲ）が堆積し、これより下層および窪地東縁では自然堆積土である橙灰色土を検出した。このうち灰褐色砂までが近年の堆積とみられ、下層

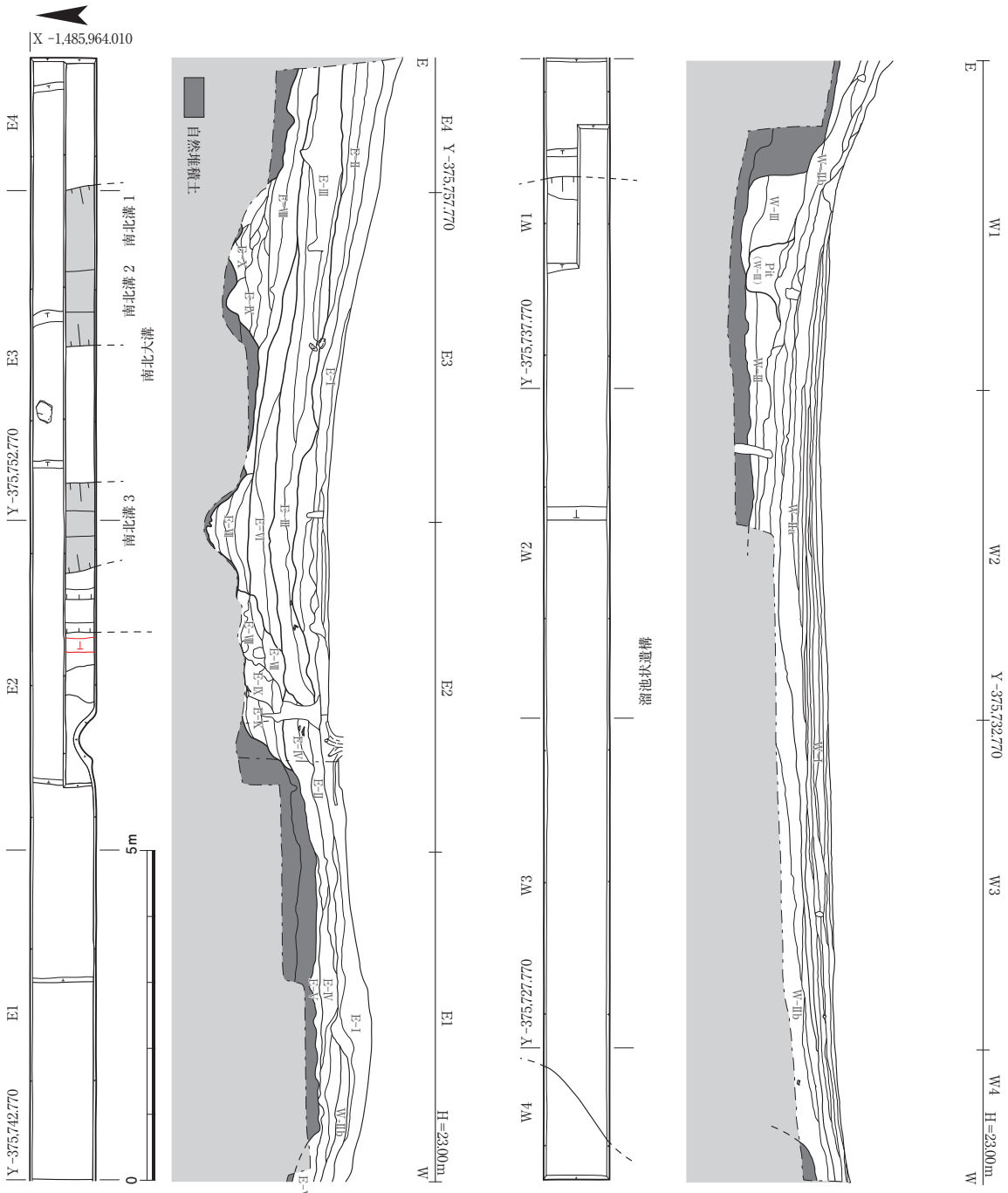


図８　第18次南調査区平面図・土層図　1：100

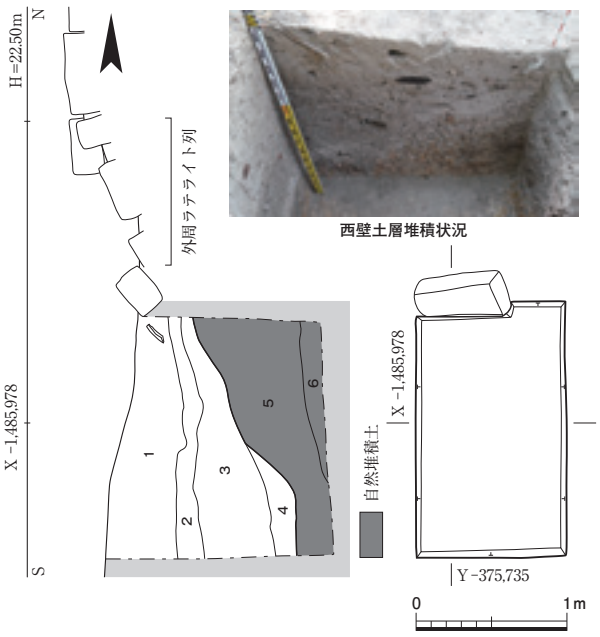
橙灰色シルトが遺構埋土と考えられる。

北調査区　土層堆積状況を確認するための掘削の結果、表土（30～65㎝、図９土層図上１・２）の直下より橙灰色土（10～45㎝、図９土層図上３）および灰色シルト（15～20㎝、図９土層図上４）の堆積がみられた。これらの土層の下面は南に向かって下降する。これより下には遺物を含まないしまりの強い橙灰色土（図９土層図上５・６）の堆積が認められ、南調査区における土層堆積との整合から、自然堆積土と考えられる。南調査区における土層堆積状況に鑑みて、橙灰色土および灰色シルトは溜池状遺構の埋土の一部と考えることもできる。

４　検出遺構

南北大溝　寺院境内東側に南北に走る通路の下層から南北大溝を検出した（図８・10）。第18次調査区では溝の西岸のみを検出しており、東側には明確な掘り込みは見つかっていない。溝底は、西岸で標高20.1ｍであるのに対して調査区東端では自然堆積上面が標高20.9ｍであり、東に向かって標高が上がる。土層堆積にもとづくと、南北大溝は上層と下層に大きく分かれる。

下層南北大溝は、溝西肩の土層堆積によれば、少なくとも４時期にわたって作り替えがおこなわれている。もっとも古い１期には、自然堆積を西肩部分で深さ



1	灰色シルト（10YR5/2）	少数の炭化物を含む	表土
2	橙灰色土（10YR5/3）	少量の橙色土塊と土器片を含む	表土
3	橙灰色土（10YR5/2）	橙色土塊と土器片を含む	溜池状遺構内堆積土か
4	灰色シルト（10YR5/2）	橙色土パッチと土器片を含む	溜池状遺構内堆積土か
5	橙灰色土（7.5YR5/2）	多量の黄橙色土塊を含む	自然堆積土
6	橙灰色土（7.5YR5/2）	多量の橙色および白色シルトを含む	自然堆積土

図９　第18次北調査区平面図・土層図　１：50

78cm程度掘り込んだ後、調査区東に南北溝１（溝心Ｙ＝－375,756.5、深さ62cm、図８土層図上Ｅ-Ｘ）が掘り込まれ、南北大溝の西肩を東西幅60cm程度護岸する（図８土層図上Ｅ-Ｘ）。２期には、南北溝１を壊して南北溝２（溝心Ｙ＝－375,756.07、幅2.85m、深さ66cm、図８土層図上Ｅ-Ⅸ）が掘削され、南北大溝西肩に新たな護岸（東西幅55cm、高さ58cm）がおこなわれた（図８土層図上Ｅ-Ⅸ）。続く３期には、南北溝２が埋め立てられて、南北大溝西肩にさらなる護岸（東西幅１m、図８土層図上Ｅ-Ⅷ）が施された。３期の護岸は２期よりも低くなり、最大でも高さ35cmしかない。最後の４期には南北大溝の埋没が進み（図８土層図上Ｅ-Ⅷ）、東肩は明確ではないものの、幅6.2m程度であったと考えられる。埋没が進んだ南北大溝内西端に新たに南北溝３（溝心Ｙ＝－375,752.7、幅1.8m、深さ65cm）を掘削し、３期の護岸の上にさらに盛土（高さ25cm）をおこなった（図８土層図上Ｅ-Ⅶ）。４期の後に、下層南北大溝は完全に埋没した（図８土層図上Ｅ-Ⅵが最終埋土）。

上層南北大溝は、下層南北大溝の上に堆積した青橙色土を掘削して造られた（図８土層図上Ｅ-Ⅲ）。下層南北大溝と同様に、上層南北大溝も西肩のみが明瞭であり、東肩を検出できていない。西肩は最大で深さ45cm掘削されており、溝底はＹ＝－375,752.7にかけて緩やかに下降した後に、東へ緩やかにせり上がる。上層南北大溝の廃絶後には、緑灰色土が短期間で堆積したと考えられる。

溜池状遺構　西区では、現地表面で目視可能な窪地の範囲にほぼ一致する、幅の広い掘り込みを検出した。第

図10　第18次南調査区東半南北大溝完掘状況（北西から）

18次調査区では東西肩を検出しており、遺構の東西幅は14.8mを測る。土層堆積状況に鑑みて、この遺構に確実にともなう堆積土は下層橙灰色シルト（図８土層図上W-Ⅲ）であり、白色砂がやや多く混じる特徴がある。下層橙灰色シルトからは、少ないながらも陶磁器片が出土した。なお、遺構埋土上面から掘り込む土坑（幅95cm、深さ65cm）を１基検出した。　**（山藤正敏・下田一太／筑波大学）**

５　出土遺物

第18次調査では表土層出土遺物も含めると1,500点近い遺物が出土した。本調査から出土した遺物は、土器、輸入陶磁器、クメール陶器、瓦、スラグ、石製品に大別できる。出土遺物の割合としては瓦22%、土器35%、クメール陶器34%、輸入陶磁器６%、スラグ２%、石製品１%となった。以下、項目別に出土遺物の概要を記述する。

土器・陶磁器　輸入陶磁器は主に中国陶磁器が出土した。種類としては青磁、白磁、青白磁と褐釉陶器を確認した。青磁では皿・盤・碗・合子片と思われる破片を確認し、産地としては主に龍泉窯系と福建系があった。図11-1は青磁の碗で見込みに環状の釉剥ぎが施され、福建系と思われる。白磁では碗・皿に加え合子も比較的多く確認した。図11-2は白磁合子の身で、Ｅ３区の暗灰色土（図８土層図上Ｅ-Ⅸ）から出土した。青白磁もわずかだが見受けられ、合子と小壺などを確認した。

クメール陶器に関しては黒褐釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器を確認した。黒褐釉陶器では壺甕類が多く（図11-4～6）、とりわけ特筆されるのは接合したところほぼ完形の壺がＥ３区から出土している点であろう（図11-4）。また、灰釉陶器では合子など小型製品も確認している（図11-3）。黒褐釉・灰釉陶器に関してはアンコール地域産とブリラム系が混在している可能性があり、今後詳細に検討していくことが必要である。

土器は、壺甕類が器種の中心をなす。ミガキを施した土師質の壺、壺甕類の蓋のつまみ部など多様な種類の土器が出土した。近年調査が進むアンコール・トム北側の土器窯の製品と比較することも必要であろう。

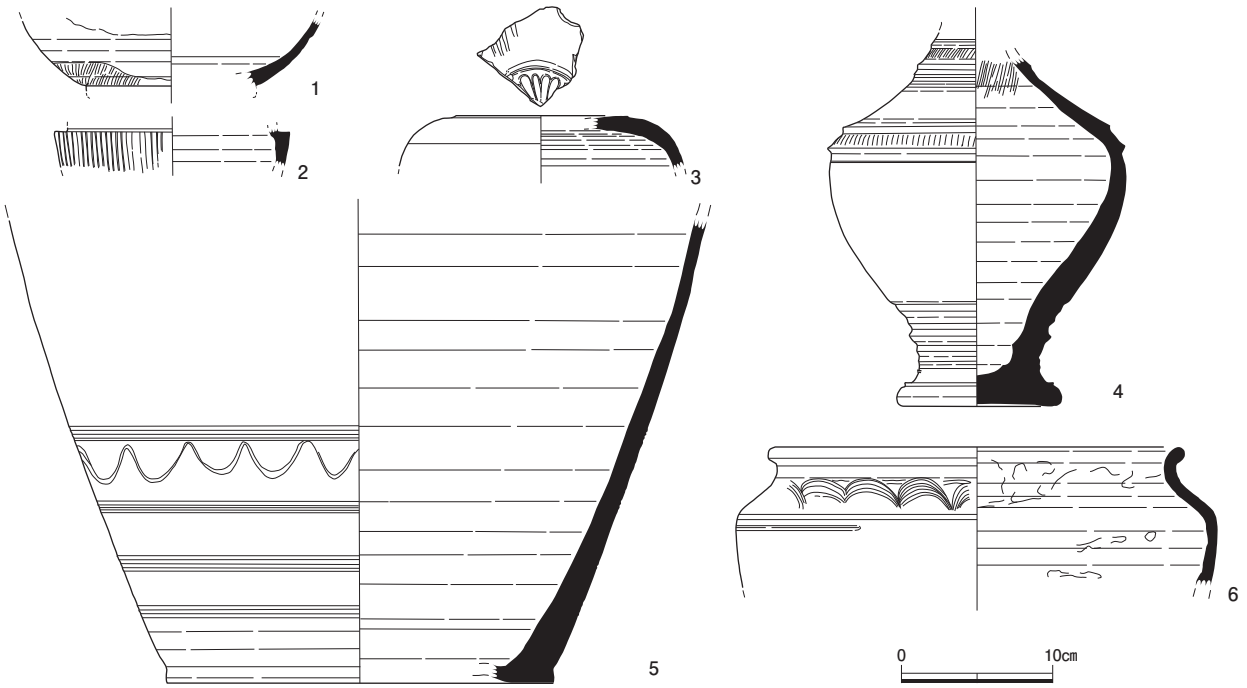


図11　第18次調査区出土陶磁器　1：4

これらの遺物の年代観は輸入陶磁器に関していえば、大まかに11～12世紀代のものから14世紀代の製品まで確認している。おそらく水路遺構の年代観を探る上で重要になるであろう遺物としては、暗灰色土（図８土層図上E-Ⅶ）出土の白磁合子、橙灰色砂（図８土層図上E-Ⅸ上層）出土の青白磁合子で、これらは11世紀から12世紀頃の宋代に位置づけられるものと思われる。ただし、同じ土層からクメールの黒褐釉陶器などが出土しており、これらが同様の年代を指し示すのか、より後の年代となるのか現時点では判断はできない。水路遺構の年代観を考える上では、他の出土遺物の精査ならびに放射性炭素年代測定の結果などと複合的に考える必要がある。

また、一連の南北大溝が掘り込まれた東区橙灰色シルトでは、土器、クメール陶器は引き続き出土するものの、輸入陶磁器では白磁中心に出土し、青磁がほとんど見られなくなる傾向を確認した。この点に関しても南北大溝の年代観に関連する可能性も考えられるが、南北大溝では他地点でも同様の傾向を示すのか把握する必要がある。　**（佐藤由似）**

瓦　総計310点（黒褐釉瓦＝108点、土師質瓦＝202点）が出土した。南調査区からは黒褐釉瓦68点、土師質瓦169点が出土した。黒褐釉瓦のうち54点は表土から出土しており、顕著な出土傾向は見出せない。土師質瓦は表土から最多の62点が出土したが、南調査区における青橙色土（図８土層図上E-Ⅳ、35点）および上層橙灰色シルト（図８土層図上W-Ⅱb、16点）からも一定数の出土がみられた。いずれの土層も下層南北大溝および溜池状遺構の廃絶後に堆積したと考えられる。

北調査区からは、黒褐釉瓦が40点、土師質瓦が33点出土した。黒褐釉瓦のうち13点、また、土師質瓦のうち23点は、下層の橙灰色土（図９土層図上３）および灰色シルト（図９土層図上４）から出土した。北調査区は西トップ寺院境内を囲む外周ラテライト列南辺に接することから、建物にともなう瓦が寺院廃絶後に流入した蓋然性が高い。

6　おわりに

第18次調査は、奈文研による西トップ寺院外周ラテライト列外側における事実上初の本格的発掘調査となった。寺院東面に通る南北通路と寺院南方にみられる窪地を横断するかたちで東西に長大な南調査区を設定し、調査区東半に南北大溝を、調査区西半下層に溜池状遺構を検出した。いずれも水に関わる遺構と推測されるが、機能を検証するためには今後さらなる調査研究が必要である。また、寺院外周ラテライト列東南隅外側に接するかたちで設定した北調査区では、表土下において南方向に下降する土層堆積を確認した。これらの土層は溜池状遺構の埋土の一部であると考えられる。

本稿は運営費交付金およびJSPS科研費JP21H04353「クメール王朝の都市構造と社会基盤の解明－高精度地形情報を利用した実査より」の成果の一部である。　**（山藤）**

註

1）杉山洋・西原和代・庄田慎矢「西トップ遺跡の発掘調査－第16次調査－」『紀要 2023』。西原和代・大林潤「西トップ遺跡の調査－第17次発掘調査・2023年度建造物調査－」『紀要 2024』。

2）奈文研『西トップ遺跡調査修復　中間報告12』2025。